

エイジズムの生起メカニズムとその年齢差および文化差 —存在脅威管理理論と社会的アイデンティティ理論の枠組みを用いた検討—

菊地 亜華里

【背景と目的】

現代社会には、年をとることや高齢であることを否定的に捉える傾向が見られ、高齢者に対する偏見や差別(エイジズム:ageism)が存在している。エイジズムは、高齢者のみならず、あらゆる年代の人々の加齢の質に悪影響を及ぼし得る重大な問題である。急速に高齢化が進行する日本でもエイジズムは問題視され、その実態や関連要因などについて研究が蓄積されてきた。しかし、それらを体系化し、エイジズムがいかんして生成されるのかというようなメカニズムに関する理論の構築を試みた研究は乏しい。

そこで本研究では、エイジズムの生起メカニズムについて、諸外国の研究で注目されている以下の2つの理論に基づいて検討することとした。まず、存在脅威管理理論(Terror Management Theory, 以下TMT)に基づくと、高齢者は人々に死を連想させ、死の脅威を喚起させる存在であるために、避けるべき対象として否定的な扱いを受けると考えられる(Martens, Goldenberg, & Greenberg, 2005)。つまり、死の不安(death anxiety)がエイジズムの生起要因と言える。また、社会的アイデンティティ理論(Social Identity Theory, 以下SIT)に基づくと、人々は自分が所属する内集団を肯定的に、外集団を否定的に評価し、自尊心を高く保っている。しかし、加齢に伴って内集団(若年層)から外集団(高齢層)への移行が生じるため、人々は自身のアイデンティティを損なわないために、より高齢な人々と自分を区別し、彼らを否定的な特徴と結びつけて評価すると考えられる(Kite & Wagner, 2002)。つまり、加齢に関する不安(anxiety about aging)がエイジズムの生起要因と言える。

Bodner(2009)は先行研究をレビューし、より若い年齢層にはTMT、より高齢な年齢層にはSITの枠組みが適合しやすいという可能性を指摘した。つまり、余命が長く、死に関連する経験も乏しいために、死を受け入れていない若年層では、死の不安がより強くエイジズムに影響する。一方で、外集団(高齢者)への移行が現実的となる高齢層では、加齢に関する不安がより強くエイジズムに影響すると考えた。ただし、この指摘について、実際に若年層から高齢層を対象にTMTとSITの両方に注目してエイジズムの生起要因を検討した研究は見られない。そこで本研究では、Bodner(2009)の指摘に基づき、若年層(39歳以下)ではTMT、高齢層(65歳以上)ではSIT、その中間に位置する中年層(40~64歳)ではTMTとSITの両方の枠組みが当てはまりやすいという仮説を立て、エイジズムの生起メカニズムの年齢差を検討することを目的とした。

本研究の仮説は、これまでエイジズムの研究を牽引してきたアメリカでの知見に基づいたものであり、まずはアメリカを調査地として仮説を検証することが必要であると考えた。そこで、研究1として、アメリカでエイジズムの生起要因の年齢差を検討した。一方、日本における研究は、主にエイジズムの実態の把握や関連要因の検討にとどまっており、エイジズムが生起するメカニズムに関する理論の構築がほとんど進められていない。そこで、TMTやSITのような諸外国で検討されている理論の枠組みを、日本にも適用することが可能であるか検討するため、研究2として、日本でも同様にエイジズムの生起要因の年齢差を検討した。そして、2つの文化圏における結果を比較し、得られた文化差について背景要因を考察した。

【研究1(アメリカをフィールドとした調査研究)】

Amazon Mechanical Turk を使用してインターネット調査を実施した。分析対象者 889 名を若年層

(30.32±4.64 歳)と中年層(52.11±7.92 歳)と高齢層(68.72±2.82 歳)に分け、エイジズム(The Fraboni Scale of Ageism(Fraboni, Saltstone, & Hughes, 1990))を従属変数、死の不安(Revised Death Anxiety Scale(Thorson & Powell, 1992))と加齢に関する不安(Anxiety about Aging Scale(Lasher & Faulkender, 1993))を独立変数とした重回帰分析を年齢層ごとに行った。その結果、死の不安は若年層のみで、加齢に関する不安は全ての年齢層でエイジズムに影響する要因として有意になった。このことから、TMT の枠組みは若年層のみ、SIT の枠組みは全ての年齢層に当てはまるということが明らかとなり、高齢層のみで仮説が支持された。

【研究 2(日本をフィールドとした調査研究)】

Freeasy を使用してインターネット調査を実施した。分析対象者 556 名を若年層(30.76±5.99 歳)と中年層(52.04±7.02 歳)と高齢層(70.75±2.77 歳)に分け、エイジズム(日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版(原田・杉澤・杉原・山田・柴田, 2004))を従属変数、死の不安(日本語版 Scale of Death Anxiety(筆者が翻訳して作成))と加齢に関する不安(日本語版 Anxiety about Aging Scale(筆者が翻訳して作成))を独立変数とした重回帰分析を年齢層ごとに行った。その結果、死の不安は若年層と高齢層で、加齢に関する不安は中年層と高齢層でエイジズムに影響する要因として有意になった。このことから、TMT の枠組みは若年層と高齢層、SIT の枠組みは中年層と高齢層に当てはまるということが明らかとなり、若年層のみで仮説が支持された。ただし、中年層においても死の不安が有意傾向($\beta=.13, p=.06$)となったことから、死の不安が全ての年齢層に共通してエイジズムに影響を与える要因である可能性が示唆された。

【総合考察】

研究 1, 2 の結果から、Bodner(2009)が指摘したように、より若い年齢層のエイジズムには TMT の枠組みが当てはまりやすいという特徴(アメリカのみ)や、より高齢な年齢層のエイジズムには SIT の枠組みが当てはまりやすいという特徴(アメリカと日本)が確認された。さらに、アメリカでは SIT、日本では TMT の枠組みがいずれの年齢層にも共通して適合しやすいという文化的特徴が明らかとなった。

エイジズムの生起メカニズムについて年齢差や文化差が見られた背景には、加齢や老いに対する価値観や態度の違いなど、さまざまな要因の影響が考えられた。特に TMT の当てはまりやすさについては、アメリカの世代間や、日本とアメリカの文化間に存在する宗教性の違いが影響している可能性が考えられた。また、対象者の主観年齢に注目すると、アメリカの中高齢層は自分の年齢を実際よりも若く捉える傾向が確認された。このことから、若さにこだわり、老いを拒む文化的な傾向が SIT の当てはまりやすさに影響している可能性が考えられた。さらに、アメリカの中高齢層や日本の中年層においては、死の不安と加齢に関する不安の間に因果関係や媒介関係が存在する可能性が示唆された。このことを踏まえ、今後は要因間の関連性を考慮した検討が必要であると考えられた。

本研究で得られたエイジズムの生起メカニズムに関する知見は、国内外におけるエイジズムの研究の発展に大いに貢献し得るものであると考える。その上、幅広い年齢層を対象とし、エイジズムに影響する要因の年齢差を検討したことから、エイジズムをライフコースに沿って理解するという新たな視点を提示したと言える。さらに、文化差を検討したことから、さまざまな文化・社会的背景を踏まえてエイジズムの生起メカニズムを理解することの必要性も示された。将来的には、本研究の知見を土台として、これまでにエイジズムとの関連が指摘されているさまざまな心理・社会・文化的要因がどのように影響し合っているのかという点を検討していくことで、エイジズムが生成されるメカニズムの更なる理解に貢献できると考えられる。(臨床死生学・老年行動学)